

とき：2002.02.02. 15:00-17:00

親の会連絡会研修旅行・講演、場所：いこいの村たてやま

(主催：NPO 難病の子ども支援全国ネットワーク)

テーマ：役員のなり手不足をどう解消するか

上智大学 岡 知史

1. [自己紹介](#)
2. [役員のなり手不足をどう解消するか](#)
3. [仲間意識と会員意識を区別する](#)
4. [親の会のイメージ](#)
5. [建設的なイメージの開発](#)

ただいま、ご紹介していただきました岡と申します。ほとんどのかたとは、もう何度もお会いしているのですが、ほとんど初めてというかたもいらっしゃると思いますので、最初に簡単に自己紹介をさせていただきます。

[自己紹介](#)

私は、現在、上智大学文学部にあります、社会福祉学科で教員をしております。この親の会にかかわったのは、いまから9年前の1993年の、ちょうどいまごろだったと思います。小林さんから突然、お電話をいただきまして、親の会の活動の支援ということで研究をしてみないかと誘っていただきまして、それ以来こうやってかかわらせていただいております。

難病児の親の会の研究なんて、日本では、ほとんどないんですね。あっても特定の病気にかかわる親の会の事例研究のような研究はあるのですが、いろんな病気の親の会をいっしょに含めて研究されたということは、いままでほとんどないと思います。海外でも英語の論文を探してみたのですが、癌などの特定の病気にかかわる親の会の研究はあるのですが、やはりいろんな病気にかかわっているいろんな親の会を含めての研究は、ほとんどないという印象をもっています。

研究がないというのは、そういう研究をしたくても、それができる場が限られていたからだと思います。つまり、異なった難病の子どもの親の会を研究するためには、異なった難病の子どもの親の会と同時に連絡をとりあえる場所が必要なんですけど、つまり具体的には、この親の会連絡会みたいな組織が必要なんですけど、それが非常に少ないということなんです。たぶん日本には、この親の会連絡会を含めて、ほんの数箇所しかないのではないと思います。たとえ、そういう連絡会があったとしても、なかなかですね、私のような外部の人間を迎えて、それぞれの団体の内部の問題点を調査してみよう、なんてやっているところはないと思います。

そういう意味で、親の会連絡会のみなさまには、ほんとうに貴重な機会を与えてもらっていると感謝しています。この場を借りて、あらためてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

役員のなり手不足をどう解消するか

さて本日のテーマですが、たぶん、どの親の会も深刻に悩んでいらっしゃる問題で「役員のなり手不足をどう解消するか」というものです。私の予定としては、2時間いただきましたので、まずは15分ほどお話をさせていただいて、それから残り40分ほど、それぞれのご意見を一人ずつでも言っていただいて、さらに休憩をはさんで、また後半15分ほど話させていただいて、また40分ほど、みなさんのご意見を聞くというような進めかたをさせていただきます。

本日のテーマ

仲間意識と会員意識は
違うのではないか



両者を区別していないことが
役員不足を深刻にしている？

まず、なぜ役員のなり手が不足するのか、なぜ多くの会員はみんな消極的で、受身的なのかという問題ですが、それは、いろんな原因があると思うのです。ひとつは、やはり子どもさんが病気なので、そのケアをしなければいけないから、会の活動に力を入れることができないとか、あるいは病気が稀な病気なので、全国に会員が散らばっていて、集まりにくいとか。

1 1
そういう原因は、子どもの難病そのものにかかわるものなので、これは、どうしようもないものだと思います。ただ役員のなり手不足を招いている原因には、いろいろあるけれども、どうしようもないものは別として、なにか、こちらの取り組みの仕方を変えていけるものがあるのではないかという問題意識をもつことは大事だと思います。

仲間意識と会員意識を区別する

それで、私の提案したいことは、これなんですね。仲間意識と会員意識とは違うのではないか。両者を区別していないことが役員不足を深刻にしているのではないか。これが、私が、みなさんに考えていただきたいと思う仮説なんです。

この仲間意識とは何かというと、親の会のみなさんは、同じ病気で、同じ体験をされてきたということで、たいへん強い仲間意識をもっておられると思います。私が、親の会のかたに接していて印象的なのは、この仲間意識は、まだ会ったことがない人にも感じていらっしゃるということなんですね。だから「まだ地方で、たったひとりで情報も無くて悩んでいる仲間がいるんだ」という気持ちで、病気についての情報などを会員だけではなく、もっと広く、いろんな人に渡してあげたいという気持ちを、もっていらっしゃるんですね。

仲間意識

- 親の会の会員は同じ体験をしていることからくる強い仲間意識がある
- 同じ体験をしていれば、会員ではなくても仲間意識がある

つまり仲間意識とは、会に入っているか、入っていないかとは関係がない。だから仲間意識と会員としての意識とは違うものだと言えると思います。

次に会員の意識ですけど、会員としての意識というのは、ひとつは会の活動や目的を知っていることですよね。よく聞くのは、親の会が、日本なんとか協会という名前だから、職員が何人もいて、大きなビルをもっていて、年間予算が何千万円というような団体だろうと誤解する人がいるということですが、これは会について、よくわかっていないということですよ。

会員意識

- 会のこと(活動や目的)を理解している
- 会の運営に参加する気持ちがある

- 2
- また、会の運営に参加する気持ちがあるというのが、会員意識の重要なポイントだと思います。たとえば、「同じ病気の人と出会えて、とても良かった。みんな仲間だという気持ちになりました。こんどのイベントも期待しています。次は、こういうことを企画していただければ嬉しいです」と（自分自身が企画するつもりがなく）言っている人は、仲間意識はすごく強くても、自分で会のなかで何かをやろうとしていないのですから会員意識は弱いと言えます。

つまり仲間意識と会員意識との関係を図に描けば、こんなふうになると思うんですね。会員意識をもっている人は仲間意識をもっている人でしょうけど、仲間意識をもっている人が、必ずしも会員意識をもっているわけではない。

3

要するに、仲間意識と会員意識を区別することで、いろいろ整理できると思うんですね。たとえば、「私たちは、みんな仲間だと思っている。しかし会の仕事をしようとするのは、ごく一部の人だけだ。なぜだろう」という疑問は、仲間意識と会員意識を区別していないから出てくるんだと思います。

これは、次のように考えればいいわけですね。つまり「私たちは、みんな仲間だと思っている。しかし会員としての意識は無いので、会の仕事をする人は一部だけだ。」とすると矛盾は何もでない。

すると、次の課題は、じゃあ、会員意識をもってもらうにはどうすればいいか？ということなんですね。

4

仲間意識と会員意識



仲間意識があっても
会員意識をもたない
人が多くいる

仲間意識と会員意識の混同と区別の例

×「私たちは、みんな仲間だと思っている。しかし、会の仕事をしようとするのは、ごく一部の人だけだ。なぜだろう」

○「私たちは、みんな仲間だと思っている。しかし、会員としての意識は無いので、会の仕事をする人は一部だけだ」

5

今後の問題

- ・ 会員意識をもってもらうにはどうすればいいか

もうひとつのテーマ

会員意識をつくっていくためには、親の会のイメージを明確に会員に伝えていく必要がある。

しかし、役員自身にも、そのイメージは明確になっていないのではないか。

7

これはたいへん難しい問題で、また後半にお話したいと思いますが、今回の前半のお話を復習しますと、仲間意識と会員意識は違うのではないかと、ということです。そして、その両者を区別していないことが役員不足を深刻にしているのではないかと、というのが、私の仮説なんです。みなさんに、これについてぜひいろいろご意見とか質問をうかがいたいと思っています。(以下、略)

親の会のイメージ

では、後半のお話をさせていただきます。前半でお伝えしたのは、会員には、会員意識をもってもらうことが大事だということでした。そして、そのためには役員自身が親の会のイメージを明確に会員に伝えていく必要があると思います。

しかし、私は、いままで何十人という親の会の役員のかたにインタビューしてきましたが、親の会のイメージについては役員のかた自身も、まだ迷っている状態であるように思えました。

私は、インタビューのなかで親の会のイメージについて特に質問することはありませんでしたが、インタビューの記録を読んでいると、いくつかのイメージが語られているんですね。それを紹介してみます。

6

ひとつは、情報発信基地というイメージですね。難病児親の会の役割は情報を提供するということに大きな重点が置かれているというのが、他の障害児の親の会と比べての特徴だと思うんですね。稀な病気の医学情報が手に入りにくいとか、情報の質によって命が左右されるという意味で、情報の提供は非常に重要だと思います。それを重視したイメージが、この情報発信基地というイメージですね。

このイメージは、難病児親の会の使命をよく表現しているという点では素晴らしいと思うのですが、情報を発信する一部の人と、それを受信するだけの、その他大勢という形になってしまっていることが問題だと思います。大部分の会員は積極的な参加が必要ない、情報の受け手にすぎないという感じです。

「情報発信基地」 というイメージ

- 病気についての
情報発信を重視
- 大部分の会員は
情報の受け手

次には、会社ではないというイメージですね。これは、特に男性の役員さんにインタビューをしたときに感じたものです。つまり親の会を考えるときに、自分が勤めていらっしゃる会社と比べて考えていらっしゃるんですね。その特徴は、会社と違って、上司からの命令で動かない組織なんだということですね。そこに親の会の難しさがあり、また魅力もあるんですが、親の会の会長がいても会長の命令で、みんなが、バツと動くわけではないんですね。

このイメージは会社とは違うということは明らかにしてくれるわけですが、じゃあ、親の会というのは、
8 どういうものなんだという、なかなか答えが出てこないところが難しいところだと思います。

「会社ではない」 というイメージ

- 会社勤めの男性の役員
がもちやすいイメージ
- 命令で人が動かない

次は、自治会とかPTAとかというイメージですね。役員のみ手不足について、インタビューでお聞きしたとき、「自治会、町内会だって役員のみ手がないでしょう」とか「PTAでも、役員のみ改選のときには出席が少ないじゃないですか」とか、自治会やPTAのイメージで、親の会を理解されているかたが何人もいらっしゃいました。

これは、自治会、町内会も入っていないとゴミの日の連絡とか来なくて都合が悪いし、入っているほうがいいだろうということですが、役員になると面倒くさくてたいへんだぞ、というイメージですね。

「自治会」「PTA」 というイメージ

- 入るしかないが、役員にな
ったら損をするだけだ
というイメージ
- 会を選べないという意識

それから、もうひとつ、これは、おっしゃっているかたは多分、意識はしていらっしゃるがなかったと思うのですが、自治会、町内会、PATというのは、複数の会のなかから選べないですよ。一丁目に住んでいたら、一丁目の町内会に入るしかないわけで、二丁目の町内会には入れない。

それと同じで、難病児親の会も、なんとか病親の会なら、たいてい、一つしかないわけですよ。ですから、Aという地域にいて、Bという病気だとしたら、Cという親の会に入る、と自動的に決まってくるわけですね。もちろん病気によっては、いくつかの会に同時に入ることはできるかもしれませんが、基本的には、ひとつの病気に対して、ふたつも三つ

も親の会が同じ地域にあるということはありません。これも町内会や PTA と似た点だと思います。

このイメージの弱点は、多くの人が町内会や PTA に対してもっている「役員になったら面倒なだけ」というイメージが、そのまま親の会のほうに流れてしまうことです。これでは、ますます役員のなり手は少なくなってしまう。

「貧乏くじ」 というイメージ

- 誰もやりたくはないが、誰かがやらなくては行けないというイメージ
- 「はめられた」という意識(被害感)

そして最後に「貧乏くじ」というイメージですね。これは誰かがやらなくては行けないが、誰もやりたくはない、それが親の会の役員のイメージだということです。公共のゴミ捨て場の掃除にたとえた人もいました。つまり誰かがやらなければ行けないけれども、誰もやりたくはないという例です。だから「貧乏くじ」なんですね。

役員になった人のなかには、前の役員から「はめられた」とか、「だまされた」というような印象をもっていた人もいました。これは、ちょっと極端な例かなと思いましたが、実は、そうでもなくて、たとえば、次の役員を見つけるにはどうしたらいいかという私の質問に対して「会のことを、まだ何も知らない純粋な人を誘う。会のことを少しでも知っている

人なら、役員を引き受けるはずがないから」と答えた人がいました。もし、そんなふう

建設的なイメージの開発

さて、まとめですけれども、いま私は 4 つのイメージを紹介しました。ひとつは、情報

建設的イメージの開発

- 難病児親の会は新しい組織のタイプであり、これまでの他の組織のイメージにあてはめて理解することは難しい
- 明確で、建設的なイメージを開発していく必要があるのではないか

発信基地、それから、会社ではないということ、そして自治会、PTA そして、貧乏くじですね。他にもいろんなイメージがあると思うのですが、インタビューのなかで、はっきりと語られていたイメージが、この 4 種類なんです。残念ながら、このいずれも、いまいろいろ申し上げたような理由から、役員のなり手不足の解消には、充分につながらないイメージだと思うのです。

じゃあ、どうすればいいのかということですが、私が強調したいのは、親の会についての建設的なイメージの開発の必要性です。

さらに、私が強調したいのは「難病児親の会は新しい組織のタイプであり、これまでの他の組織のイメージにあてはめて理解することは難しい」ということですね。だから、イメージをつくりあげていくことは難しいし、それだけに会についての理解をしてもらうことも難しいわけです。したがって「明確で、建設的なイメージを開発していく必要があるのではないか」ということですね。

じゃあ、そうやってそういうイメージを作り上げていくかということですが、それは、この親の会連絡会の目的にも通じると思うのですね。違った病気の親の会が、このように自由に話せるという場は非常に貴重だと思います。親の会がどうあるべきかということは、どこかの本をさがせば書いてあることではないんです。みなさんで話し合い、それぞれの会の体験、経験を交換していくうちに、徐々に、それぞれの参加者の頭の中にできてくるイメージが大切だと思っています。

ぜひ、そういう目的のためにも、この親の会連絡会がうごいてくださればと思います。ご清聴ありがとうございました。



当日の様子：男性ばかりが写っていますが、映っていない部分に女性たちがいます。